今週の為替相場見通し（2019年9月17日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		106.76 ～ 108.26	108.10	107.00 ～ 109.00
ユーロ	（ドル）		1.0927 ～ 1.1105	1.1073	1.0950 ～ 1.1200
（1ユーロ=）	（円）		117.55 ～ 119.88	119.76	118.00 ～ 121.00
英ポンド	（ドル）		1.2233 ～ 1.2506	1.2503	1.2400 ～ 1.2700
（1英ポンド=）	（円）	＊	130.81 ～ 135.22	135.16	134.00 ～ 138.00
豪ドル	（ドル）		0.6837 ～ 0.6895	0.6880	0.6800 ～ 0.7000
（1豪ドル=）	（円）	＊	73.01 ～ 74.50	74.37	73.00 ～ 75.50

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、＊印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

為替営業第二チーム　玉井 美季子

（1）今週の予想レンジ：　107.00 ～ 109.00 円

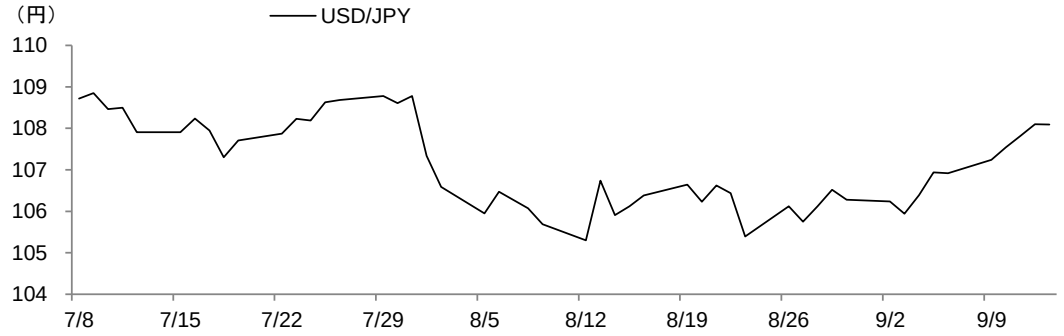
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は円安が進む展開。9 日に106 円台後半でオープンしたドル/円は、ムニューシン米財務長官が日米貿易合意に関し前向きな発言をしたことや、日銀が追加緩和を検討するとの見方もあり107 円を上抜け。翌10 日は、米中通商協議進展への期待感に加え、五・十日にかかる本邦輸入企業の動向も意識され、ドル/円は107 円台半ばまで上昇した。その後一旦下押ししたが、中国が通商協議で米農作物の購入拡大に合意の見込みとの報道に107 円台後半まで上昇。11 日も米中通商協議への期待感は続き、米金利上昇や堅調な株価を横目にドル/円も続伸し、その後も中国による米国製品の関税免除に関するリスト公表も好感して1 か月ぶりの高値圏で推移。12 日には、米国の対中関税の引き上げ時期延期の報道で108 円を突破した。その後ECB 政策理事会の追加緩和発表を受けたユーロ/円の売りにドル/円も107 円台後半まで連れ安となったが、トランプ米大統領の側近らが追加関税の一部先送りや撤回に繋がる限定的な合意案の提示を検討との報道に108 円台前半まで値を戻した。13日はリスク選考ムードの中、週高値となる108.26円まで上昇。米8月小売売上高や米9月ミシガン大学消費者信頼感指数が市場予想を上回ったこともあり108円台を中心とした底堅い展開となり108円台前半で越週した。

今週のドル/円は上値の重い展開を予想する。今週は日銀の金融政策決定会合とFOMCが開かれる。FOMCでは25bpの利下げは織り込まれているが、FRB内でも利下げを巡り意見が割れているようで、相場に影響を与えるのは今後の利下げ見通し及び賛成・反対の内訳等であろう。前回のFOMC後にはパウエルFRB議長が利下げサイクルの開始ではなく、調整であることを述べたことでタカ派と受け止められドル/円は上昇したが、今回も同様のスタンスが確認されれば、足元のリスクセンチメントの改善と相まってドル/円は上昇する可能性がある。そしてその後に日銀の金融政策決定会合が開かれる。一部ではマイナス金利深堀り等の期待もあるようだが、黒田総裁は長期金利が低すぎることへの懸念も示しており、日銀に残された手段は限定的であろう。日米の金融政策の違いが意識されればドル/円の上値は抑えられよう。また、先週は米中通商協議の進展期待からリスクセンチメントが改善しドル/円は底堅い推移となった。中国側が歩み寄りの姿勢を見せているように感じるが、これまでも同様の動きがあり決着が長引く状況下、合意の見込みが無い中で、もう一段の上昇は難しいのではないか。引き続きヘッドラインに振れる展開には注意が必要だが、1か月半ぶりの高値圏にいる中、今週は金融政策に注目が集まりそうであり、上値の重い展開を予想する。

（3）先週までの相場の推移

先週（9/9～9/13）の値動き：　安値 106.76 円　高値 108.26 円　終値 108.10 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

為替営業第ニチーム 森谷 友一

(1)今週の予想レンジ: 1.0950 ～ 1.1200 118.00 ～ 121.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

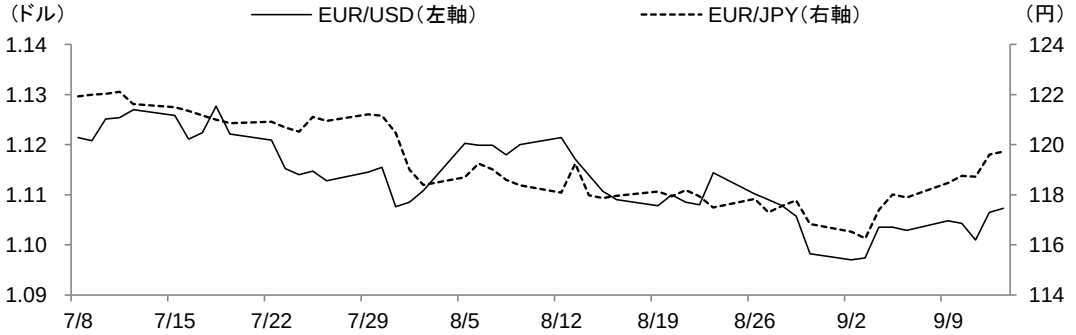
先週のユーロ相場は上昇する展開。週初9 日に対ドルで1.10 台前半、対円では117円台後半でオープン。ドイツが影の予算で公共投資を増やす可能性があるとの報道や、12 日のECB 政策理事会での量的緩和期待が後退する中で、ユーロ買いが強まり対ドルで1.10 台後半、対円では118円台半ばまで上昇。その後はドル買戻しから反落し、翌10 日は、ECB 理事会の開催が近づく中で積極的にポジションを取る動きは見られず、対ドルで1.10 台半ば、対円で118円台後半の狭いレンジで推移した。11 日は翌日のECB 政策理事会を意識してか、対ドルで1.10 を割り込み下落。しかし、売り一巡後は米中貿易摩擦の緩和期待で円売りが先行する中、対円で119円台前半まで上昇する動きにサポートされ対ドルでも1.10 台を回復。12 日はECB による利下げや量的緩和の再開など包括的な追加緩和導入の決定を受けて、対ドル/対円でそれぞれ一時週安値となる1.0927/117.55円 まで急落。しかし、ドラギECB 総裁が金融政策よりも財政政策が主たるツールになるべきと主張したことや、主要なユーロ圏加盟国が量的緩和再開に反対だったことが報じられると、対ドルで1.10台後半、対円で119円台後半まで急反発した。13日もユーロ買い優勢の展開が継続する中、対ドル/対円でそれぞれ一時週高値となる1.1109/120.02円をつけた後も底堅い対ドルで1.10台後半、対円では119円台後半で越週した。

今週のユーロ相場は底堅い推移を予想する。先週のECB理事会では、預金ファシリティ金利を▲0.50%に引き下げを決定。更に、11月から月間200億ユーロのペースでのAPP再開、APPの下で満期償還される有価証券の再投資継続、TLTRO3の仕様見直し、超過準備を抱える銀行に対する金利階層化システムの導入も決定され、事前に想定されていた措置がまとめて盛り込まれる結果となった。しかし、ECB高官からはAPP再開に反対する声も相次いでいたことに加え、ドラギ総裁からも「金融政策よりも財政政策が主たるツールになるべき」との発言もあった。今回の理事会で想定されていた措置が一気に出し尽くされた印象もあり、当面はECBに対する追加緩和期待は高まりにくいだろう。ECB圏内の経済指標は決していい状況ではないものの、財政拡大観測も意識されていることも併せて考えると今週はユーロの買戻しが継続すると予想。また、今週は17～18日にかけてFOMCが開催される。25bpの利下げが予想されており、注目は今後の追加利下げに関する手がかりが得られるかという点。今回での打ち止めを示唆できるほどにグローバル経済の動向は良好ではないと考えられ、引き続き追加利下げ観測を残す結果となるそうであり、その場合は素直にドル売りで反応すると予想。相対的にユーロ相場を支える材料となり得るだろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/9～9/13)の値動き:

(対ドル)	安値 1.0927	高値 1.1105	終値 1.1073
(対円)	安値 117.55	高値 119.88	終値 119.76



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.2400　～　1.2700　　134.00　～　138.00　円

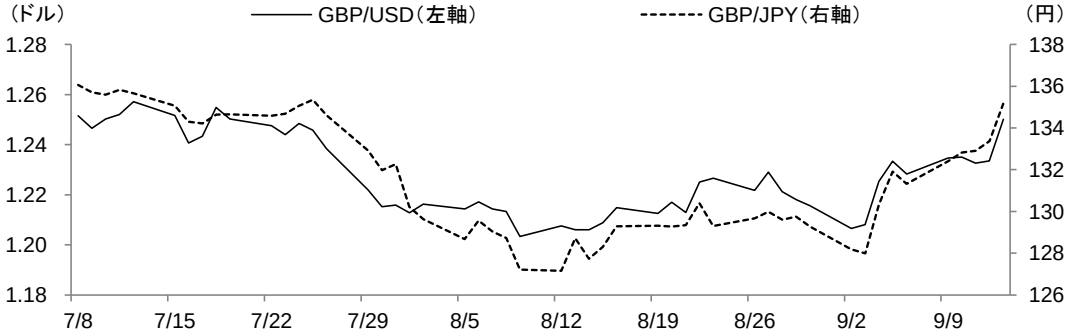
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、上昇。対円では、ユーロに連れた乱高下を例外に、週を通してほぼ一貫した堅調を維持したものの、これは円軟調を反映した値動き。対ドルでは、方向感を欠いた膠着を支配的とした。ただし、対ドル、対ユーロなどでも、9日、13日には、それぞれ英固有の要因を手掛かりに水準を切り上げる局面も見せた。9日のポンド上昇は、同日発表された英7月鉱工業/製造業生産の上振れを素直に好感した値動きと考えられた。13日のポンド上昇は、英大手紙による「(北アイルランドの)民主統一党(DUP)が北アイルランドだけを一部単一市場に残留させる方針を受け入れる意向を示した」との観測報道を好感した値動きと解釈された。事実なら、離脱合意成立に向けた大きな前進と受け止めることができたからだ。12日の乱高下は欧州中銀理事会後のユーロの乱高下に連れた値動き。同理事会は各種政策を盛り込んだ金融緩和パッケージを発表。発表直後、資産購入(量的緩和)規模が月200億ユーロにとどまり、その開始時期も11月まで先送りされたことなどが「期待したほど積極的な緩和策ではない」と読まれ、ユーロは上昇した。その後、資産購入、金融緩和策維持の約束(フォーワードガイダンス)に期限を設けなかったことなどが、逆に「予想以上に緩和的」と受け止められ、ユーロは反落した。更に程なく、市場の想定した緩和策をほとんど打ち出した「出尽くし感」を言い訳にユーロは反発に転じた。ポンドはユーロに連れて乱高下したあと、13日に掛けては離脱合意に関する上述楽観の広がりを手掛かりに、ユーロを含む主要通貨に対して全面堅調で週の取引を終えた。

今週の英ポンド相場は、続騰を予想。先週主要通貨市場を動かしたほとんど全ての要因に説得力を感じない一方で、週引けに掛けてその調整を見なかった事実に、(ポンド高方向、ユーロ高方向、円安方向などに)相場を操る圧力(持ち高の偏り)の存在を感じるのがその理由。先週一貫した円安はリスク許容量の高まりを反映した値動きと考えられた。確かに、ボルトン米大統領補佐官の解任(10日)は、米中通商交渉の進展や地政学的リスク(イラン情勢、北朝鮮情勢など)の軽減を予見させると読めるものの、トランプ大統領が最高責任者であり続ける以上、同補佐官の後任が誰になったとしても、予見不能性や不透明感は残るはずだろう。北アイルランドを巡る上述観測は程なくDUPから否定されたにもかかわらず、ポンド堅調は変わらなかった。そもそも、英本土との統一を謳うDUPや保守党(正式名称はConservative and Unionist Party)の少なからぬ議員が、北アイルランドだけを英本土から切り離し、特別扱いする案を呑むとは考え難い。市場が、信じたい情報だけを信じ、都合の悪い情報は無視する教科書な例と言えよう。ユーロの乱高下も同様で、「予想以上に大胆なパッケージ」をユーロ売り材料にしておきながら、数時間を経ずに「出尽くし感」をユーロ買いの理由とする市場に、典型的な後講釈を見る。冷静に考えれば、マイナス金利の深掘り、資産購入規模の拡大、購入資産の条件緩和など、欧州中銀に打てる手はまだ残されているはずだろう。離脱交渉に右往左往するポンド相場で、英経済指標(7月鉱工業/製造業生産)の上振れ(上振れたと言っても前年比マイナス)がポンド買いを促したというのも、全く腑に落ちない。今週は18日(水)に英8月CPI、19日(木)に英8月小売売上高といった経済指標に加え、19日(木)には英中銀金融政策委員会を控えるが、ポンドが特段材料視する可能性は考え難い。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/9～9/13)の値動き:　(対ドル)　安値　1.2233　　高値　1.2506　　終値　1.2503
(対円)　安値　130.81　　高値　135.22　　終値　135.16



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

為替営業第二チーム　岡本 明生

(1)今週の予想レンジ:　0.6800　～ 0.7000　　73.00　～　75.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

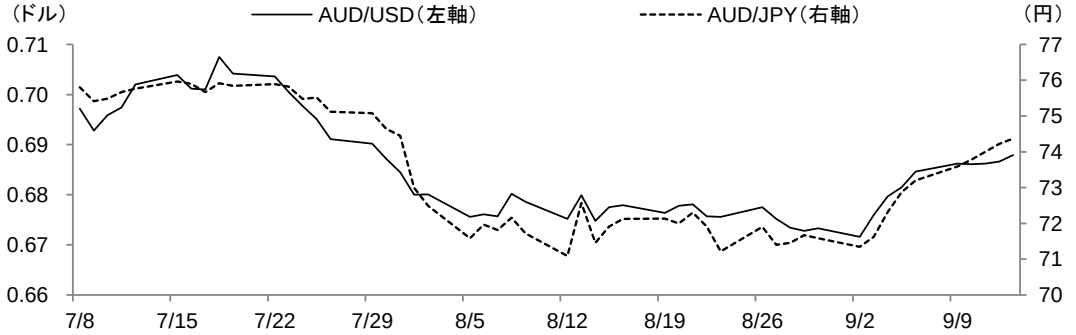
先週の豪ドルはもみ合いとなった。週初9日は弱い中国8月貿易収支を追加緩和期待に加えて、豪7月住宅ローン許可や豪7月住宅融資総額が強く、豪ドルはじりじりと買われる展開。サウジアラビアの新しいエネルギー省の大臣が原油減産について示唆、原油先物が上昇すると豪ドルも一時0.68660まで上昇した。翌10日は、トランプが中国と来週対談するとの報道など材料あるも、豪8月NAB企業景況感、NAB企業信頼感は予想比弱く、豪ドルは上値重く推移。その後中国がQFIIとRQFIIの投資制限を撤廃とのヘッドラインで若干上昇したが、米株や原油価格を睨みながら結局狭いレンジでの推移となった。11日も同様の展開となっていたが、中国紙が米中貿易関税の悪影響緩和に向けた策を講じるとの報道あり、豪ドルは 0.686台前半から0.6885レベルまで急伸。その後、中国政府が25%の追加関税対象から除外する米製品のリストを公表も、豪ドルは利益確定の売りをこなしつつ上げ幅を縮小した。その後はトランプ大統領がイランへの制裁緩和を検討との報道で原油先物が下落、豪ドルもつれ安の展開。12日はトランプ氏が10月1日予定の対中関税率引き上げを15日に変更と発表。また中国側も米農産品購入拡大とのヘッドラインで豪ドルは0.6890手前まで上昇した。その後のECB追加緩和は反応薄も、米国側から米中協議の暫定合意に関するヘッドラインあり、リスクオフの巻き戻しから豪ドルは大きく買われて週高値0.6895をつける場面もあった。13日は0.6860近辺で取引開始後、米中双方から対決姿勢軟化を示す報道が流れると米中貿易問題への打開期待が高まり、豪ドルはじり高の展開となり0.6870台まで上昇。米8月小売売上高が市場予想を上回り個人消費の底堅さを示す結果となったことを受けて、米ドルが他通貨比買い進まれると、豪ドルは一旦オープンレベルまで低下するもすぐに戻し、その後は底堅い値動きで結局0.6880レベル、対円で74.32円レベルで引けた。

今週の豪ドル相場は堅調推移を予想する。米中融和ムードが相場全体の支援材料となっており、リスクセンチメント改善期待は継続。一方、原油価格はサウジアラビア原油関連施設への攻撃を受け供給制約が意識されて上昇しているものの、需要減を連想させるイベントでもあり、豪ドルへの影響は一概にプラスとは言えないか。今週は中銀イベントが多い。米指標の堅調さを鑑みれば週央の米FOMCは▲25bp利下げがメインシナリオか。また、日銀は追加緩和の可能性の議論を始めるに留まると見られるが、グローバルに金融緩和方向との見方は不変。米中協議にも大きな方向感に変化なければ、豪ドルは0.68台半ばで底堅く推移すると予想する。前回政策金利据え置きとなったが、17日（火）発表の豪中銀金融政策決定会合の議事録は確認しておきたい。

(3)先週までの相場の推移

先週（9/9～9/13）の値動き:　（対ドル）安値 0.6837　高値 0.6895　終値 0.6880

（対円）安値 73.01　高値 74.50　終値 74.37



（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。